

二〇一七年六月一九日 開催〈グローバル・リテラシーとは何か：マイノリティー言語と社会の視点から考える（第一弾）〉

グローバル・リテラシーの向上のために

——グローバル化を目指している濟州島の大学生の事例から考える

高 龍珍

■講演者……高 龍珍（韓国・濟州漢拏大学校教授）
■司 会……矢頭典枝

1. はじめに——グローバル社会の到来とグローバル・リテラシーの重要性

近年、人や情報が国境を越えて移動するグローバル社会の到来によって、各国の大学ではグローバルバリエーションに対応できる教育の在り方が検討されています。韓国の教育部は、このようなグローバル社会で活躍できる人材育成を目指してグローバル人材育成政策を打ち出しており、また日本の政府も二〇二〇年までに海外留学生者数一二万人を達成することを目標に、学生たちの留学支援を積極的に進めています。

OECD（経済協力開発機構）は、二一世紀に求められる国際標準の能力として「キー・コンピテンシー（Key Compe-

tencies）」という概念を提案し、「言語を含めた多様な道具を相互作用的に活用し、自律的、主体的に判断し、多様な他者との協同を通して社会を作っていく能力」と定義づけています。一方で、二〇一一年に日本政府が設置したグローバル人材育成推進会議や大学が実施する教育プログラムにおいて提示されている「グローバル人材」の素養として、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性、チャレンジ精神、協調性、柔軟性、③異文化に対応する理解と自国民としてのアイデンティティが挙げられています。本講演のテーマ「グローバル・リテラシー」はこのような能力とも重なっていると言えるでしょう。

これらの能力は、海外留学体験学習や海外でのインターンシップなどにおいて獲得されると言われており、それを期待する大学によって、海外体験・派遣プログラムの取り組みが盛んになってきています。こうした海外での体験を通じたグ



高龍珍氏



司会の矢頭先生

ローバル・リテラシーの獲得は、多言語多文化環境の社会に
適応できる能力の獲得、また社会的実践の一つとしてのキャ
リア形成にもつながっており、そこには多言語習得や言葉を
使用する時に私たちが行う計画や調整、海外での体験、また
リテラシー能力に対する振り返りと自己評価が大きく影響し
ていると言えるでしょう。

本講演では、こうした問題意識から、国際的な観光地の多
言語環境、またそこで必要とされる地域の人材育成を目指し
て海外へのインターシッピングを積極的に実施している濟州島

の大学の事例を取り上げ、グローバル化社会におけるリテラ
シー能力および人材育成について考えていきたいと思えます。

2. 観光地、国際自由都市としての濟州島

濟州島は、周辺の海流の影響によって年間の平均気温が約
十五度と冬にもほとんど零下になることのない温暖な気候か
ら、韓国のハワイとも評される国内屈指のリゾート観光地と
なっています。また、火山島特有の独特な自然景観を有して

おり、二〇〇七年には「済州の火山島と溶岩洞窟群」が世界自然遺産に、二〇一〇年には世界ジオパークに登録され、観光地としての国際的な知名度も高くなっています。近年では、「済州オルレ」「オルレ」は済州島の言葉で、「路地」の意味）と呼ばれる島内の自然景観を楽しむトレッキングが韓国で人気を集めています。

また、済州島は、アジアインバウンド誘致に積極的に取り組んでおり、近年ではアジアとの地理的近接性を活かした、中国発着の国際クルーズ船の寄港が増加しており、船舶を往来手段とした国際観光形態が活発になっていることも特徴に挙げられます。

済州島の国際観光政策について韓国政府は、一九九八年に済州島を北東アジアの観光ハブに発展させるため「済州国際自由都市計画」を打ち出し、さらに二〇〇二年には同計画を推進するため、同島への観光産業の投資減税措置等を中心とした「済州国際自由都市特別法」を制定しました。

3. 済州島における多言語状況とグローバル・リテラシー

3.1 済州語の特徴

済州島のローカル言語である済州語は、二〇一一年にユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が発表している「消滅の危

機にある言語」に指定され、危険のレベルが最も高い「非常に深刻な消滅危機にある言語(critically endangered)」に分類されました。

済州語の特徴は、現在は使われていない韓国語の文法や古い単語が多く残っていることです。そのため、同じ韓国人であっても済州語を完全に聞き取ることが難しいこともありま

す。済州語の中で最もよく知られている表現は、「훈(ホン)저(ジヨ)음(オップ)서(ソ)예(エ)」だと思えます。日本語では「いらつしやいませ」「ようこそ」といった歓迎の意味を表します。この表現は、標準韓国語の「훈(ホン)자(ザ)오(オ)세(セ)요(ヨ)」という表現と音がよく似ているのですが、標準韓国語のほうは「一人で来てください」という意味になり、済州語の意味とは全く異なります。このギャップが面白いとされており、韓国では多くの人が済州島の方言と聞くと、最初にこの表現を思い浮かべるのではないかと思います。

それからもう一つ、済州語の面白い特徴があります。韓国語の「삼(サム)촌(チョン)」という単語は、標準語では血がつながっている男性の家族や親戚のおじさんと呼ぶ場合の呼称です。ところが済州島では、この呼称を血のつながっていない人や女性に対しても使います。実際、済州島では近所のおじいさんや知り合いの人など、自分より年上の人には「삼

(サム)幸(チョン)」を使って気軽に呼んでいます。これはソウルなどでは考えられない、濟州島ならではの風習ではないかと思えます。

3.2 濟州島における多言語状況

濟州島の多言語状況について、まず社会レベルから見ると、濟州語と標準韓国語の二言語併用、いわゆるダイグロシア(diglossa)の状況になっています。例えば、学校や市役所などの公的な場所では標準韓国語が使用されますが、家庭内や私的な場面では濟州語が使用されており、二つの言語の使用場面と機能は比較的是つきりと分かれています。また、観光地をはじめ外国人観光客が多く訪れる場所では外国語の使用も増加しています。

また、個人レベルの言語使用は、濟州語と標準韓国語のバイリンガル(bilingual)が中心となります。ただ、その一方で、濟州島の人は昔から日本をはじめ海外のいろいろな地域に出稼ぎに行くことが珍しくなく、現地で外国語を習得してから濟州島に戻ってきた人がたくさんいます。さらに、濟州島の中では、観光業に従事するために外国語を学んでいる人も多く見られ、最近が多言語の使用も日常的になりつつあります。

3.3 濟州島におけるグローバル・リテラシー

このような多言語状況の中で人びとが言葉を使うことを考えると、言語使用を単なるコミュニケーションの手段としてではなく、社会生活や社会参加に関わる社会文化的な要素も含めた広い概念として捉え、グローバル化に対応するための総合的かつ実践的なりテラシーを身につけることが求められます。つまり、多様な言語環境(ローカル言語も含む)において社会参加の実践を行うためには、言語能力、社会言語能力、社会文化能力をそれぞれ適切に使用できるグローバル・リテラシーが必要となるのです。そのためには、様々な政策的、教育的な支援や試みを行わなければなりません。グローバル・リテラシー実践のための教育の中心を担うのは大学ではないかと思えます。特に地方の大学の場合、その地域の言語環境や社会状況に応じた教育が重要になります。

濟州島の場合、国際観光地という土地柄、多言語支援や教育については他の地域よりも進んでいると言われています。特に濟州島の大学では、こうした濟州島の状況を踏まえ、グローバル人材の育成のため、グローバル・リテラシー教育や支援を様々な形で進めています。

4. 済州島の大学におけるグローバル人材育成

韓国では近年、若者の失業率が一〇%まで悪化しており、大学を卒業してもそれに見合った働き口に就けない現実から海外での就職を目指す若者が増えています。また就職難という理由以外に、国内で働いてから海外で再就職をするケースも多くなっています。実際に、雇用労働部が支援した研修や斡旋、インターンプログラムなどを通じて海外に就職した若者の数は、二〇一三年は一六〇七人、二〇一四年は一六七九人、二〇一五年は二九〇三人と増加しており、就職先の国別では、日本が一二六七人(二〇・五%)、米国が八五三人(一三・八%)、シンガポールが七二九人(一一・八%)、豪州が五五七人(九・〇%)だったそうです。

済州漢拏大学では、外国語教育センターの教育プログラムの改正、子供のための英語講座の増設、中国人留学生のための韓国語講座の開設、日本語教育カリキュラムの改正が進められています。特に最近は、これまでの英語学習を中心とした流れから、中国語やロシア語、日本語など、より多様な言語を学習する方向へと変わってきています。また一時、爆発的なブームとなった海外の語学研修を通じた外国語学習という形から、様々なチャンネルを通じた外国語学習、つまり、語学学習を主目的としない国際ボランティア活動など、多様

な海外体験プログラムへの参加を通して外国語を学ぼうとする傾向が強くなっています。済州漢拏大学の場合もこうした外国語教育の新たな環境やニーズ、流れに合わせて、外国語教育プログラムの転換や新たな試みが行われています。

済州漢拏大学のインターンシップ・プログラムは、グローバル人材育成のために二〇一七年度に開始されました。このプログラムでは、「グローバル化が進む世界において、韓国人として主体的に物事を考え、言語、文化、価値観の異なる人びとに自分の考えを効果的に伝え、その差異を乗り越えてお互いを理解し、新しい価値を生み出すために一致協力して行動に踏み出すことができる人材を養成する」ことが目標に定められています。

具体的な教育課程は、研修国と職務分野によって、シンガポール(二〇名、調理、F & B(料飲部門))、日本(二〇名、免税店)、オーストラリア(二〇名、ビューティー部門)、ドバイ(五名、調理、F & B)、オーストラリア(五名、幼児教育トレーナー)、ドイツ(五名、調理、F & B)の六つの課程が設けられています。その中で、日本を対象とする課程の教育プログラムの主要内容は、職務に関する分野(二七四時間)、語学に関する分野(二七二時間)、その他(五四時間)で、国内研修(二六週、二九〇時間)、国外研修(八週、三二〇時間)という構成になっています。

5. 海外インターンシップ・プログラムを経験した学生へのインタビューから

海外インターンシップ・プログラムに参加した学生は、どのような経験をして、どのようなリテラシーを身につけてきたのでしょうか。ここでは、実際にプログラムに参加した二人の学生へのインタビューの結果から、海外で直面した問題やインターンシップに対してどのようなことを感じているのかを紹介したいと思います。

ケース1：KF1（二二才、会社員、女性）

〈研修国・研修期間〉

ドイツ：二〇一四年一月～二〇一五年一〇月（二二ヶ月）

日本：二〇一六年一月～二〇一六年九月（九ヶ月）

〈グローバル・リテラシー〉

(1) 海外で直面した問題

KF1はインターンシップ先（現地）において、言葉の問題よりもその国の社会や文化に関する知識不足からくる問題を意識していました。例えば、ドイツでは何人かで食事した後自分が食べた分を個々に会計することを知らずに、人情味がないかと思っていたそうです。また日本では、レストランで注文する時に頼む料理を間違ったこと、タクシーの乗降時に

自動ドアだということを知らずに困ったこと、電車の中では誰も携帯電話の通話をしていなかったこと、郵便局や店で人が多い時には列に並んで自分の順番を待たなければいけなかったことを問題として感じていました。そして、このような問題の認識は、KF1はドイツおよび日本の社会文化に関する新たな知識を習得することにつながっていったと考えることができます。

(2) 海外インターンシップ全体を通して

海外のインターンシップの成果をどのように考え、評価したのかについて、KF1はグローバルな状況でのコミュニケーション能力が向上したことを実感できたと話しています。また、日本の文化、日本人の親切さ、真面目な生活、贅沢をしない暮らしぶりも理解できるようになったと言います。これらのコメントから、KF1の言語使用に対する意識が高まり、自己の言語能力の向上について評価するようになったことがわかります。さらに、言語だけではなく、異文化に対する多くの気づきがあったこともうかがえます。このように、KF1が海外インターンシップでの経験を通して自分の言語使用に意識を向けるようになったことや習得した言語的、社会文化的知識は、グローバル・リテラシーの一部として捉えることができるでしょう。

ケース2：K M 1(二四才、会社員、男性)

〈研修国・研修期間〉

日本：二〇一五年一月～二〇一五年九月(九ヶ月)

〈グローバル・リテラシー〉

(1) 海外で直面した問題

インターンシップ先(日本)でコミュニケーションをする時に困ったことについて、K M 1は主に言語面の問題を挙げました。例えば、買い物をする時に言葉が通じなかったこと、また入国管理局でも意思疎通ができずに困ったことがあったそうです。K M 1は、これらが自分にとって言語の大切さと怖さを同時に味わう経験になったと振り返っています。また、現地の仕事では、敬語を使う時に特に強く意識していたという話もありました。

(2) 海外インターンシップ全体を通して

海外のインターンシップの成果については、日常的に使う日本語能力を磨くことの大切さが理解できたと話しています。そして、自分のグローバルなところでのコミュニケーション能力が向上したことも実感できるようになったそうです。このように、K M 1が日本で様々なコミュニケーションの問題に直面し、そこで言語の大切さに気づき、やがて自分の能力の向上を実感できるようになったということもまた、グローバル・リテラシーの一つとして考えることができるでしょう。

6. おわりに

最後に、これからグローバル時代に必要なグローバル・リテラシーと人材育成のための教育の在り方についていくつか提案したいと思います。

まず、グローバル社会での言語環境を考えるには、英語中心の外国語環境だけではなく、地域の言語を含む個人により多様な言語環境と言語使用を捉えようとする視点が必要になると考えられます。

次に、グローバル社会に必要なコミュニケーション能力についても考え直す必要があります。言語的な知識だけではなく、社会言語、社会文化知識をも含めた知識を習得することが求められます。そして、これまで想定されていたような単なるコミュニケーションのツールとしてだけではなく、異文化理解をもとにした実践的な社会参加によるリテラシー能力を身につける必要があります。その際には、従来のグローバルに向かう視点だけではなく、ローカルにも向かう視点、いわゆるグローバルな視点を持つことの重要性も忘れてはなりません。

さらに、今回のインタビューでは取り上げられませんが、国内外におけるインターンシップなどの体験学習プログラムは、グローバル・グローバルの両方の視点を体験でき



講演をする高氏

る機会の一つになる可能性もあります。つまり、グローバル社会におけるリテラシー能力や多様な言語文化知識を習得すると同時に、グローバル人としてのアイデンティティを振り返る機会にもなるのです。今後の大学教育では、このような視点を踏まえた上で、グローバル・リテラシーの向上を実現できるような充実した教育内容を考案していくことが緊急の課題だと考えています。